



# 日刊動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合

〒260 千葉市中央区要町2番8号 (動力車会館)

電話 (鉄電) 千葉 2935・2939 番  
(公) 043 (222) 7207 番

96.11.13 No. 4498

# これが「国労解体」の方針の正体だ!

JR総連・革マルの、「国労解体方針」の正体がいよいよ明らかとなつてゐる。彼らの「国労解体方針」とは、何のことはない、「会社への対応がまだ生温い」「もっと迫力をもて」「毅然としろ」と、当局に必死に泣訴し、当局の権力を使って国労を潰そうというだけのことだ。国鉄労働者ならば、JR総連・革マルの正体は誰だつて知つてゐる。結局できることは、当局に奴隷の忠誠を誓うことをとおして、当局に国労解体を頼み込み、当局をけしかけられるだけのことだ。

## つい本音が!

言わなければいいものを、この本音をついまくしたててしまつたのが、「公益企業レポート」に載つたJR東労組東京地本委員長加藤インタビュー記事だ。加藤は、「東京地域本社の現状をどう見るか」と質問されてこの質問とは全く無関係に、いきなり「国労非難」を始めてしまふ。頭のなかには「国労解体しかないからだ。加藤は旧動労時代からそういう人物だつた。しかもその「国労非難」の「理由」は、唯一しかなくない。「彼らはほんとうに仕事をしない」「仕事をすると指導し、実行させてゐる」……これだけである。もちろんこんなウソが何処にも通用しないことは誰もが知つてゐる。全く架空の根拠をデッチあげてそこから「非難」

が始まるが、それからは、ファシスト組合としての本音が止まらなくなるでできてしまふのだ。加藤が言つてゐるのは次のとおりだ。

## 不当労働行為のハードルを越えろ

「労働組合がこんなことを言うのはおかしいとおもわれるでしょうが、管理者には(国労組合員に対して)、指揮・命令権を立てて毅然たる態度で臨んでいただきたい」「会社は、『不当労働行為だ』と言われることがイヤかもしれないが、そんなことは不当労働行為でも何でもないので、越えていかなければならないハードルだと考えるべきだ」「(国労を)野放図にしても良いのか。悪貨が良貨を駆逐するのは速いわけですから、経営の責任において、速やかにこの種の問題を解決していただきたい」といふのである。

当局に、「『不当労働行為のハードル』を超えてもつと不当労働行為をやつて国労を解体しろ」と、あけすけに当局に要求するのだ。一体これが労働組合の言うことか!

## 処分じゃ甘い、首を切れ!

しかし、これだけにとどまらない。あげくの果てには次のよ

うに言う。「(処分だけでは)全然解決に至りません」「労務契約をしてゐるわけですから、仕事をしないんだつたら会社にとどめておく必要は何もないわけです。辞めてもらえば良い」「経営陣に改革時のような迫力と力強さがあればできる」と。「処分だけでは解決に到らない、分割・民営化のときのように首を切れ」と当局にけしかけてゐるのである。これがJR総連の卑劣な本音であり正体だ!

## 国労解体以外眼中に無し!

しかも加藤は、次の質問で、「横浜支社は、東京地域本社分割の走りになる可能性もあるか」と聞かれるが、何とこれに對す

る回答も「さきほど言つたような問題が、実は東京より深刻です。国労の比率が多いことですから、回答するのだ。何を聞かれても、質問には関係なく答えは国労解体だけしかない。国労解体以外のことは眼中にないのが現在のJR総連・革マルの現状だということだ。

ここからは、瀬戸際の危機にたつたJR総連の姿が浮き彫りになってくる。JR総連革マルは、支配権力からの「お払い箱」におびえ、最後の生き残りの道を「国労解体」に求めている。しかし、その正体たるや結局のところ、当局の手を使う以外ない。まさにJR総連は組織崩壊の危機にたつてゐる。今こそ、ファシスト組合に転落したJR総連を解体しよう。

公益企業レポート

(昭和30年1月17日第3期郵便)



JR東労組・加藤東京地本委員長

「組合の立場から東京地域本社の現状をどのように見なしていますか」

JR改革しなければならぬ状況  
管理者は指揮・命令権立て臨め

JR改革をしなければならぬ状況にあると思

### 公益企業レポート 加藤のインタビュー記事